

(肝属郡田代町大原立神)

位置と環境

立神遺跡は、両側を700m級の山々に挟まれた標高280mの河岸段丘上に位置する。錦江湾に注ぐ雄川との比高差は7mを測る。最も近い海岸である内之浦大浦港からは直線距離にして7km離れた内陸に位置する。

調査の経緯

調査は、水田農業確立小規模排水対策特別事業に伴い、田代町教育委員会が調査主体者となり県教委委員会の協力を得て、平成元年（1989年）9月25日～10月19日まで実施した。

遺構と遺物

縄文時代後期中半（およそ3500年前）の市来式土器の時期に該当する円形の竪穴住居跡が1軒検出された。直径は4m80cmを測り、中央部に直径1m84cmの凹みがみられる。深さは周辺部が24cm、中央部はさらに14cm深くなっている。中央部の凹みは焼土と炭化物が堆積しており、炉跡と考えられる。床面は池田火山灰の軽石層まで掘り込まれている。軽石の面は、通常の場合では締まりが弱く崩れ易いが、この床面は粘土質の土で堅く突き固められている。そのため、埋土と床面の境は剥がれるように明確である。しかし、壁面は突き固められていないので、故意に突き固めたのではなく、日常の生活によって床面のみ踏み固められた可能性もある。なお、住居



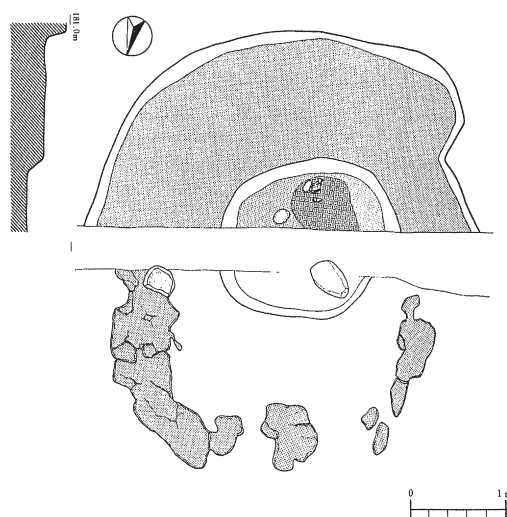
写真1 縄文時代の竪穴住居跡



第1図 立神遺跡の位置

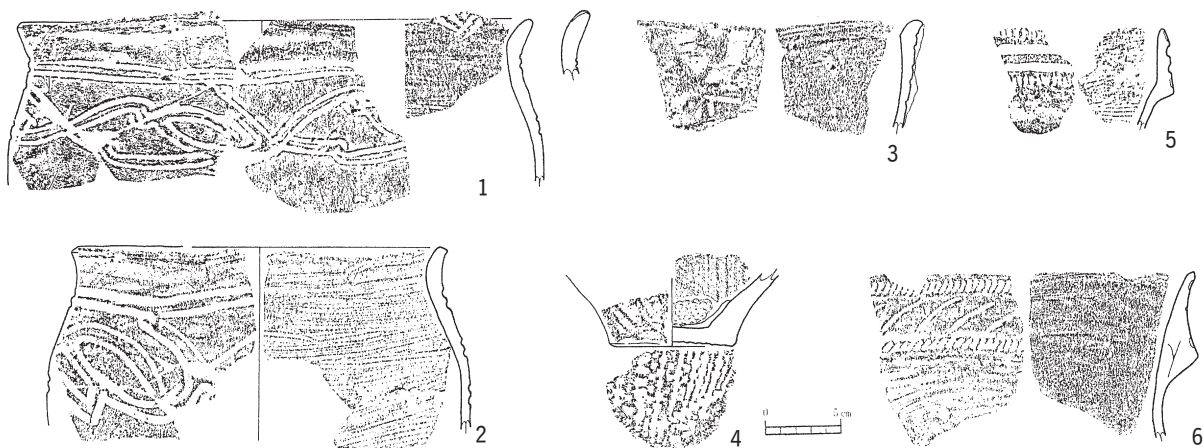
跡内には柱穴は確認できなかった。

本遺跡では市来式土器のほかに指宿式土器も多く出土し、松山式土器と型式不明土器が少量伴っている。指宿式土器は、色調がピンク色をしている点や胎土の特徴が指宿地方で出土する土器に類似するこ



第2図 竪穴住居跡実測図

とから薩摩半島との交流が窺える。これらの土器の中には開聞岳に噴出源のある黄ゴラがこびりついた指宿式土器も出土している。指宿式土器を黄ゴラが直接覆った例は、山川町成川遺跡と根占町前田遺跡で類例がある。ほかの型式の土器に黄ゴラがこびりついた例はなく、一度降下した黄ゴラが二次的作用によって土器にこびりついたと考えるよりも、土器に直接黄ゴラが降下したと考える方が妥当である。したがって、



第3図 縄文土器（1～4指宿式土器，3・4黄ゴラ固着，5・6住居跡内出土の市来式土器）

指宿式土器を使用していた時期，あるいは土器の廃棄後直ちに黄ゴラの火山堆積物に覆われたことが窺える。今後黄ゴラを指標とした縄文時代後期前半～中半にかけての土器編年の研究が進むものと思われる。縄文時代の石器はノミ形石器2点と石鏃1点が出土した。

なお，B地点では9世紀～10世紀代の土師器や須恵器とともに，被熱した大量の石が投げ込まれた土坑が検出された。床面で2 m10cm×60cmの長方形をなし，検出面からの深さは1 m40cmでかなり大型の土坑である。礫は土坑の半分より上に検出し，全部

で193個，364.5kgの重さであった。用途については不明である。

特徴

縄文時代後期中半の市来式土器を伴う竪穴住居跡の検出例は，西之表市浅川牧遺跡と加治木町干迫遺跡しかなく，大隅半島では初めてである。また，開聞岳噴出の黄ゴラが固着した指宿式土器の出土は，山川町成川遺跡・根占町前田遺跡に次いで3例目であり，この付近まで当時の噴火の影響を強く受けたことが分かった。

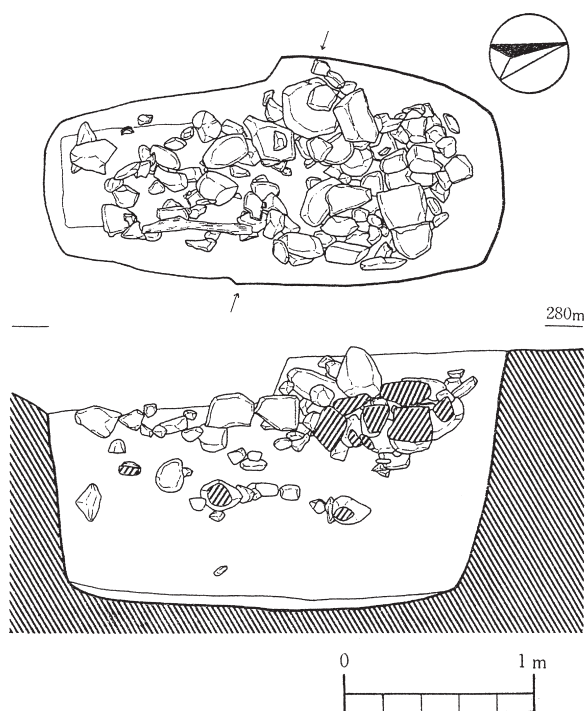
資料の所在

出土遺物は，田代町教育委員会に保管されている。

参考文献

田代町教育委員会1990「立神遺跡」『田代町埋蔵文化財発掘調査報告書』2

（東 和幸）



第4図 平安時代土坑遺物出土状況

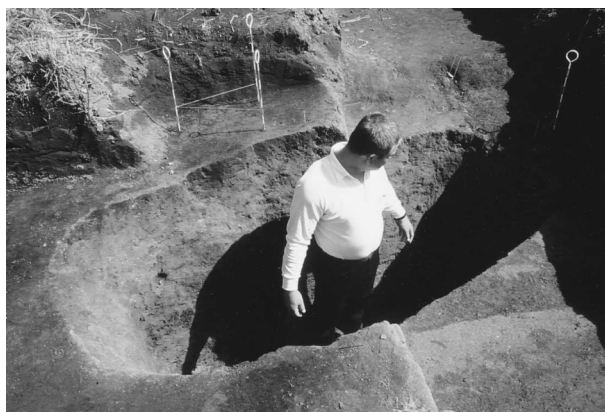


写真2 検出土坑